

## 第8章 スポーツ

ちようやく  
跳躍の選手高飛ぶつかのまをえんてん炎天の影いきなりさみし

寺山修司『空には本』より

リオ オリンピック

### 開会式

第三十一回夏季五輪リオデジャネイロ大会が平成二十八年（二〇一六年）八月五日（日本時間六日）開幕した。南米大陸初となる祭典。開会式のテーマは「環境保護」、各国選手団の国旗と一緒に、一本の木の苗の鉢を抱えた少年少女が参加した。選手も行進の際に自然樹の種を鉢に入れる演出もあった。

映画監督フェルナンド・メイレレスの指導（演出）でブラジルの歴史が紹介された。先住民、ポルトガル人、アフリカ人、そして日本人を表現するパートが盛り込まれた。

ブラジルは、ポルトガルから来た人々に占領され、銃撃戦の末、ポルトガル領になった。

続いて、「アフリカから連れて来られた奴隷、奴隷の時代が長く続きました」というアナウンサーの解説が入った。鎖でつながれた人々の行進に胸が痛かった。後日、何度も紹介される開会式の様相からは、「アフリカ奴隷」の部分は省かれた。

日本からの移民、新天地を求めて日本から大勢の人々が移り住んだ。コーヒー園の開拓。それは苦難の道だった。

四年後に開催される日本でのオリンピックで、日本の歴史を紹介する時、「原爆投下」は、どのように紹介するのだろうか。

聖火リレーの最終ランナーは、アテネ五輪マラソン銅メダリスト、バンデルレイ・デリマ氏が聖火台に点火した。デリマ氏は、アテネ五輪で沿道から飛び出した男に抱き付かれて妨害されても三位に入った。あきらめない姿勢が世界の感動を呼んだ。ブラジルの英雄。みんなが覚えていた。開会式は、映画監督らしい演出で、すばらしかった。華やかなオリンピックだが、ブラジルには、貧しい人々の暮らしもある事を忘れないで。

### 三宅宏実の親孝行

八月六日、この日は、メダルラッシュに沸いた。競泳男子四百メートル個人メドレーで、萩野公介（二十一歳）選手が金メダルに輝いた。瀬戸大也（二十二歳）選手は銅メダルを獲得した。柔道では高藤直寿選手、近藤亜美選手が銅メダル。

重量挙げは女子四十八キロ級の三宅宏実（三十歳・身長百四十七センチ）選手が三位に入り、ロンドン大会の銀メダルに続く二大会連続のメダルを手にした。左膝と腰を痛め、痛み止めの注射をしての試技だった。かたわらには父親の三宅義行氏が指導者として、いつもついている。義行氏はメキシコシテイオリンピックピック重量挙げフェザー級で銅メダルを獲得した人。

「お父さんやったよ」「よくここまでやってくれた。本当によく練習してくれました。練習したからジャークの三回目が挙げられた。誰よりも練習したね。よく頑張った。本当にありがとう」と、褒めたたえた。宏実選手は、こらえていた涙を流し、親子で握手を交わした。

父親の期待を一身に受けての銅メダルだった。父親のために勝ち取ったメダル。自慢の娘は、ジャークを成功した後、バーベルに頼ずりした。

## カットマン

卓球女子シングルス三位決定戦で福原愛選手は北朝鮮のキム・ソンイ選手と対決し、銅メダルを逃し四位になった。

北朝鮮の選手は、福原選手を研究しつくし、死を覚悟で挑んできた。これに対し、国際大会の出場機会が少ない北朝鮮選手の情報は限られていた。テレビからは「カットマンの登場です」「カットマンをどのように攻略するでしょうか」と、「カットマン」が連呼された。キム選手のプレーを観戦して私は驚いた。

私の家の庭には、大きな木の下に卓球台があり、小学校を退職した母は、来客と卓球を楽しんでいた。小学校の時の教え子が「僕は、よく先生の家に遊びに行き、お菓子をもらった。先生は元気だろうかと通りがかりにのぞいたら、下駄を履き、モンペ姿で、頭に手ぬぐいをした先生が、卓球をされていた」という話が残っている。家に来た人は、卓球をワンゲームしないと帰してもらえなかった。

母のプレーは、相手が打って来る球を、ラケットに当てるだけだった。つまり「カットマン（守り中心のカット主戦型）」。しかし、甘い球は凄まじい形相で打ち込む。運動神経抜群だった。

足柄上郡大井町に体育館ができた時、母は一人で見に行って「中学生は弱かった」と言いながら帰って来た。どうやら中学生と卓球をして遊んできたようだった。この時、母は八十代で元気だった。「どこも痛くない」と言っていた。

### シンクロ 夫婦の会話

日本はシンクロナイズド・スイミング・デュエット（三井梨紗子、乾友紀子組）で銅メダルを獲得した。

「足ピンとしている。足つるね」「そうだね」

「だれの足か、わからないね」「そうだね」

「足の開きが合わなかったので、減点だった」

「同調性というのですね」「私たち夫婦には、ないね」

「四位と、わずかな差ですね」「同調性は大切だね」。

### レスリング 夫婦の会話

「ルールが、わからないわ」「髪の毛を、つかんだらいけないんだよ」

「外国の選手は、みんなつかむね」「だから注意を受けている」

「髪の毛、みんな長くしている。ペリーショートの人はいない。髪の毛引っ張って、振り回しちゃうよ」

「それはいけません。相撲も、鬘まげを持ったらルール違反です」

「そうだね。朝青龍が勝つても、鬘まげに手がかかっていたので物言いがついて負けになった事があったね」「座布団が飛んだ」

「レスリングは、つかみ合いの喧嘩だよ。それをみんなで『ガンバレ日本!』と応援する。レスリングは、オリンピック種目から外していただきたい」

「今回、日本は柔道もレスリングもメダルを沢山取った。次は日本がメダルを取れないようなルールを作るかもね」「そうかな」

「四十八キロ級なら私もオリンピックに出場出来るわ」

「体重だけではダメだね。一秒で場外に放り出されて負けです」「そうだね」

「負けの速さで、ギネス世界記録認定だ」。

## 左手が肝心

小さかった娘たちを連れて、近所のボーリング場へ遊びに行った。若者が二人の子どもの手を引いた私を見て、「あんなになりたくないわね」と言っているのが聞えた。平凡な生活に幸せを感じていた私に、その言葉は強烈な印象を残した。しばらくすると、ボーリングは下火になり、廃虚と化したボーリング場は売りに出され、今は巨大なマーケットになっている。

派手な格好の姫路麗ひめじうらというプロボーラーが出現し、今またボーリングがブームのようだ。テレビに出演して「左手でバランスをとる。左手が肝心」と言った。私は、「あれ、どこかで聞いた言葉だな」と思った。

娘が高校生の時、クラス対抗のスポーツ大会があった。娘は卓球出場に決まった。「一度もやったことがない。どうしよう」。家にある「しゃもじ」で父から「ラケット」の持ち方を教えてもらった。その時、「左手でバランスをとる。左手が肝心」と父が助言した。素振りを何度も繰り返し、スポーツ大会に行った。娘は大喜びで帰宅した。「私たちのチームが学年優勝だった」と。今度は、卓球の福原愛選手の左手に注目しよう。

## みんなの体操

オリンピックを期に、何か運動をしよう。そうだ、朝六時二十五分からEテレで放送している

『みんなの体操』をすることにした。この放送は、土曜日も日曜日も祝日も三百六十五日、毎日ある。筋肉をほぐす運動が、ぎっくり腰に好いという。

十分間の間に『テレビ体操』と『ラジオ体操第一』または『ラジオ体操第二』をする。『ラジオ体操第一』と『ラジオ体操第二』を連続してやる時もある。

『ラジオ体操』は、小さい頃からやってきたのだが、おや？ なんだか違う。「振付が新しくなっているのですか」と夫が言った。違うのは、レオタードを着たモデルの女性がキビキビと元気がよい所だ。リズムよくテンポよく無駄がない。「胴体運動」などは、美しい踊りのようだ。挑戦するが、なかなか同じようにはいかない。「昔も、こんなだったっけ？」。暇な時に、台所で自主練習（自主練）をしている。ぎっくり腰になりそうだ。

モデルの女性の中に原川愛さんがいる。目が大きくてかわいい。ラジオ体操の愛ちゃんだ。気に入っている。冬はレオタードでは寒そう。年の初めの放送では、全員で側転した。「決まった、すばらしい」。

ピアノ演奏者は、名川太郎さん、幅しげみさん、加藤由美子さん。日替わりで演奏する。とてもうまい。決められた通りの機械のような演奏だ。ヨロヨロしたり、間違えて止まってしまったりしたら大変なことになる。一つもミスがない。名川太郎さんは、最初に名前をピアノで弾く。「♪タロウ」と聴こえるから、おもしろい。短調、ちよつと暗い性格なのでしょうか。

体操の指導員も女性一人、男性二人、日替わりで行う。三人共、声も態度も清々しく好感が持てる。女性の指導員が繰り返し「力（りき）む」という言葉を使うので気になった。

平成二十八年十一月二十五日の十分間を記録してみた。この日は『テレビ体操』と『ラジオ体操第二』。

「力りきまずに、行おこなって行きましよう」「運動中に息を止めてしまうと力みやすくなります」「力んでいいですか」「力みすぎずに呼吸を整えて」「力まずに、ぐるっとまわして」「力まずに柔やわらかく」「力まずに軽快に行いましよう」、これでは気にならない方がおかしい。

翌日、二十六日（土）の中年男性指導員も「力りきむ」という言葉を二回使った。「少し力みが入りますが、なだらかに」「ここは力まないように行いましよう」。一体、「力む」とは何か？ 三省堂国語辞典によると、「力む」＝息をつめて、力をこめる。「顔を真っ赤にして力む」のように使う。私は、これからも「力まず」続けようと思っている。しっかりと動くと、なかなかの運動量だ。腰痛が治った。

ところで、童謡『ぞうさん』を作曲した團伊玖磨だんいくまさんが、『ラジオ体操第二』を作曲したと知る人は少ない。團さんはNHK人間大学（一九九七年四月～六月放送）『日本人と西洋音楽』のテキストの最後の回で、「音楽には何より暖かさが必要だと思っています。そして、その結果、私の書いた曲が喜ばれれば、それで私は満足です。もとより、だれが書いたかなどは問題ではありません。『花の街』も『ラジオ体操第二』も、その気持ちで書きました」と記していた。エッセイ『パイプのけむり』の著者。



## おだわら体操

平成二十九年六月十一日、NHKテレビ『おはよう日本』を観ていると、「おだわら体操」が紹介された。

指導員が、「これはなんだかわかりますか？」と質問した。アナウンサーが、「くねくねしていただきますね。へびですか」と言った。「違います。メダカです」「メダカですか」「小田原は童謡『めだかの学校』の発祥の地なんですよ」「へー、知りませんでした」。

次に「これはなんだかわかりますか？」と質問した。アナウンサーが「パクパク、大きく口を開いてワニのようですね。小田原には、ワニがいるのですか」と言った。「いいえ、これは小田原提灯です」「へー、そうなんですか」。私は笑い転げた。

## ピョンチャン オリンピック

### フィギュアスケート男子

平成三十年（二〇一八年）二月十七日、平昌（ピョンチャン）冬季オリンピックで、フィギュアスケートの男子で羽生結弦選手が金メダル、宇野昌磨選手が銀メダルを獲得した。

羽生選手は、昨年十一月の右足首靭帯損傷の怪我からの復帰戦で、「頑張った右足に感謝」だった。スケートリンクが、ファンから贈られた大好きな「プーさん」のぬいぐるみで埋まった。ス

タジオのインタビュアーでは、「自転車に乗れない」と意外な事を話した。

宇野選手は、団体戦でも高得点を出し、チームに貢献した。こつこつと積み重ねてきたものが花開いた。いつも一緒にいるのは弟。この兄弟はアメリカで育ったので英語が話せる。

田中刑事選手は、十八位だった。田中刑事選手の名前は本名。「刑事」は（けいじ）と読む。正義感の強い子に育ってほしいという思いを込めて名づけたそうです。

羽生選手の演技を日本中がテレビの前で見守り、感動の涙を流し安堵した。アナウンサーと解説者は「すばらしい」を連呼した。夫が「ほっとしたね」と言ったので、私も「そうだね」と言った。珍しく意見が合った。

### 藤井聡太さん六段に昇進

同日（平成三十年二月十七日）、将棋の最年少プロ、藤井聡太五段が朝日杯オーブン戦で初優勝し、六段に昇進した。史上最年少で中学生では初めて。準決勝で羽生善治二冠（四十七歳）を、決勝で広瀬章人八段（三十一歳）を破った。藤井六段は十五歳六ヶ月。

二月十八日の読売新聞は、フィギュアスケートの羽生結弦選手の「羽生」には（はにゆう）と、将棋の羽生善治竜王の「羽生」には（はぶ）とルビがしてあった。同じ漢字だが、読み方が違う。